【ATC フィロソフィ㉕】

こんにちは、アークテックコム株式会社で、技術書類の作成と翻訳を行っています豊原 信です。

Tel：050-6864-6201
Fax：050-6864-6202
E-mail：
m.toyohara@arcteccom.jp

自燃性

今月は弊社のフィロソフィ（考え方）と応援メッセージについてお話します。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

弊社のフィロソフィ（考え方）の続きです。

創意工夫を続ける

人生や仕事の目的に向かっていくには、日々の僅かずつの創意工夫の積み上げが必要です。これが成功をするための王道と言われています。

例えば、「自分で始めた事業にはどうも将来性がなさそうだ。だから新しい事業展開をしたい」と考えるとします。しかし、そうは言っても人材はいないし、技術もない。結局それはかなわぬ夢であって、とうていできっこない。そう考えるのではないでしょうか。しかし、そうではないのです。

例えば、繊維関係の縫製工場を経営しているとします。メーカーからこういうものをつくってくれと言われて、型紙など必要な材料をもらい、裁断して縫う。このような加工を、30 人ほどの社員を雇ってやっている会社だとしましょう。工業用ミシンを 30 台並べ、１枚縫ったらいくらという賃加工で従業員に工賃を支払う零細企業というわけです。

それでも、例えばボタン穴をかがるにしても、この前まではこうやってミシンで縫っていたけれども今度はこうしてみようというふうに、いろんな工夫を試みるのです。新しいことに挑戦すると必ず行き詰まって「これはどうしたらいいのだろう」と考えることになります。そうすると、その解を求めて先輩や同業者などに「ボタン穴をかがるところがうまくいかないのだけれども、何かいい方法はないでしょうか」と聞きに行きます。友達に会っても同じように聞きます。もし大学で縫製のことに詳しい人がいれば、そういう先生にも聞いたりします。

いろいろな人に聞くうちに、「それだったら、繊維産業ではないけれども、こういう産業で同じようなことをしているところがありますよ」などと教えてくれる人に行き当たります。そこで、教えられたところに行ってみると、まったく業種は違うけれども、同じようなことを思いもかけない方法でやっているわけです。「あっ、なるほど！こういうすばらしいやり方があったのか」と気がついて、それを自分のところに導入し、改善していく。

そういうことを次から次へとやっていくと、それまでは型紙や布地を支給してもらって裁断と縫製を行い、１枚当りいくらというふうにただの賃加工をやっていたのが、ミシンの縫い方をどんどん工夫しているうちに、いろいろな縫製技術を身につけた専門業

者になっていくのです。

　すると、柔らかい布をミシンで縫製するだけではなく、強力な工業用ミシンを導入して、非常に硬い衣料、例えば革ジャンみたいなものまで縫えるようになる。そのうち、「陸上自衛隊向けで強靭な布でつくった服が要るらしい」というような話を聞きつけては、「私のところではこういうものが縫えるのです」と名乗りを上げ、新しい注文をもらってくる。そこでも新しい技術を教えてもらい、自分のものにしていく。このように、次から次へと芋づる式に技術を身につけていくわけです。

　つまり、大学などで得た学問ではなく、人から教えてもらう耳学問によって技術は進んでいくのです。大学どころか高校もやっと出たという程度の人でも、こうやって知恵をつけていけばいいのです。

　この考え方の原点は松下幸之助にあると思います。松下幸之助は小学校も出ておらず、すぐに丁稚奉公に行かれました。その後は、もっぱら耳学問で知識を伸ばしていかれたのです。なぜ耳学問だけで伸びたのかというと、そこに「創意工夫」があったからです。「何でや？」と常に疑問に思い、そこから工夫を重ねていく。

　地道な努力を積み重ねることが大切です。その積み重ねの中で創意工夫をし、改良改善を続けていくことが、成功を遂げていくただひとつの方法だと言ってもいいと思います。

自ら燃える

　物には可燃性、自燃性のものがあるように、人間のタイプにも火を近づけると燃え上がる可燃性の人、火を付けても燃えない不燃性の人、自分でカッカと燃え上がる自燃性の人がいます。

　何かを成し遂げようとする人は、自ら燃える情熱をもたなければなりませんし、そのためには自分のしていることを好きになると同時に、明確な目標を持つことが必要です。

自然性をつくる

　では、「燃える人」になるにはどうするか。これは次の項の「仕事を好きになる」ということにも関係してきますけれども、自分から燃える人は、人から言われたから仕事をする、命令されたから仕事をするというような人ではありません。言われる前に自分からやるという積極的な人が、「燃える人」なのです。

　燃えるタイプの人は、目の前の現実にある状況を少しでも良くして、目的や目標に近づけるために、改善して少しずつ良くしていこうと考える人です。そういう性格の持ち主が自分の仕事を好きになると、完全に自分から燃えます。ですから仕事を好きになることが大切です。

　もうひとつ、自ら燃えさせる方法があります。自分から燃えるには、自らの使命を心得ている人です。人生観を持っている人です。

　どのような考えや価値観で生きようとしているかです。このような人に仕事を好きになってもらうように仕向けるのです。そして、新たな使命感、責任感も持ち、自ら燃えあがる人になるのです。

仕事を好きになる

　仕事をやり遂げるためにはたいへんなエネルギーが必要です。そしてそのエネルギーは、自分自身を励まし、燃え上らせることで起こってくるのです。そこで、自分が燃える１番よい

方法は、仕事を好きになることです。どんな仕事であっても、それに全力を打ち込んでやり遂げれば、大きな達成感と自信が生まれ、また次の目標へ挑戦する意欲が生まれてきます。その繰り返しの中で、さらに仕事が好きになります。そうなればどんな努力も苦にならなくなり、すばらしい成果を上げることができるのです。

　こうした心境にまで高まってはじめて本当にすばらしい仕事を成し遂げることができるのです。

　仕事を好きになることで、目の前の状況を少しでも良くしてやろうと思い始めます。そうすると自分のやるべきことが分ってきて、それに夢中で打ち込むようになります。

※2025 年 04 月号に続きます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

応援メッセージです。

思いやりの心

　アルブレヒト・デューラー氏の「祈りの手」のエピソードのお話です。

　いまから 500 年ほど前、ドイツのニュルンベルグの町に「デューラー」と「ハンス」という二人の若者がいました。２人とも子沢山の貧しい家に生まれ、小さな時から画家になりたいという夢を持っていました。

　２人は版画を彫る親方の元で見習いとして働いていましたが、毎日忙しいだけで絵の勉強ができません。
思いきってそこをやめて絵の勉強に専念したいと思いましたが、絵の具やキャンバスを買うお金もままならないほど貧しく、働かずに勉強できるほど余裕はありませんでした。

　ある時、ハンスがデューラーに１つのことを提案しました。『このままでは２人とも画家になる夢を捨てなくてはいけない。でも、僕にいい考えがある。２人が一緒に勉強はできないので、１人ずつ交代で勉強しよう。１人が働いてもう１人のためにお金を稼いで助けるんだ。そして１人の勉強が終わったら今度は、別の１人が勉強できるから、もう１人は働いてそれを助けるのだ』。

　どちらが先に勉強するのか、２人は譲り合いました。
『デューラー、君が先に勉強してほしい。君の方が僕より絵がうまいから、きっと早く勉強が済むと思う』。ハンスの言葉に感謝してデューラーはイタリアのベネチアへ絵の勉強に行きました。

　ハンスはお金がたくさん稼げる鉄工所に勤めることになりました。デューラーは、「１日でも早く勉強を終えてハンスと代わりたい」とハンスのことを思い、寝る時間も惜しんで絵の勉強をしました。

　一方残ったハンスはデューラーのために早朝から深夜まで重いハンマーを振り上げ、今にも倒れそうになるまで働きお金を送りました。１年、２年と年月は過ぎていきましたがデューラーの勉強は終わりません。勉強すればするほど深く勉強したくなるからです。ハンスは『自分がよいと思うまでしっかり勉強するように』との手紙を書き、デューラーにお金を送り続けました。

　数年後ようやくデューラーはベネチアでも高い評判を受けるようになったので、故郷に戻ることにしました。デューラーは、「よし今度はハンスの番だ」と急いでニュルンベルクの町へ帰りました。２人は手を取り合って再会を喜びました。

　ところがデューラーはハン

スの手を握りしめたまま呆然としました。そして、泣きました。なんとハンスの両手は長い間の力仕事でゴツゴツになり、絵筆がもてない手に変わってしまっていたのでした。『僕のためにこんな手になってしまって』と言ってデューラーはただ頭を垂れるばかりでした。自分の成功が友達の犠牲の上に成り立っていた。彼の夢を奪い、僕の夢が叶った。

その罪悪感に襲われる日々を過ごしていたデューラーは、『何か僕に出来ることはないだろうか』『少しでも彼に償いをしたい』という気持ちになり、もう一度、ハンスの家を訪ねました。

ドアを小さくノックしましたが、応答はありません。でも、確かに人がいる気配がします。小さな声も部屋の中から聞こえきます。デューラーは恐る恐るドアを開け、部屋に入りました。

するとハンスが静かに祈りを捧げている姿が目に入りました。ハンスは歪んでしまった手を合わせ、一心に祈っていたのです。

『デューラーは私のことで傷つき、苦しんでいます。自分を責めています。神さま、どうかデューラーがこれ以上苦しむことがありませんように。そして、私が果たせなかった夢も、彼が叶えてくれますように。あなたのお守りと祝福が、いつもデューラーと共にありますように』。

デューラーはその言葉を聞いて心打たれました。デューラーの成功を妬み恨んでいるに違いないと思っていたハンスが、妬み恨むどころか、自分のことより、デューラーのことを一生懸命祈ってくれていたのです。

ハンスの祈りを静かに聞いていたデューラーは、祈りが終わった後、彼に懇願しました。

『お願いだ。君の手を描かせてくれ。君のこの手で僕は生かされたんだ。君のこの手の祈りで僕は生かされているんだ！』

こうして、1508 年、友情と感謝の心がこもった

「祈る手」が生まれました。

如何でしたか。この逸話のように強い信念と思いやりの心を持てるように成りたいですね。実は、ハンスは兄ではないかと言われています。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

豊原 信